

主要登場人物

ラインハルト・フォン・ローエングラム

(Reinhard Herzog von Rohengramm/Keiser Reinhard)

銀河英雄伝説の主人公の一人。金髪と蒼氷色の瞳を持つ貴公子。戦争の天才。元帥。ローエングラム公爵。『恐るべき冬』作戦でフェザーンを併呑、『神々の黄昏』作戦により自由惑星同盟を無条件降伏させ、帝国と同盟の一五〇年にわたる戦争に終止符を打ち、人類社会全体の統一を果たす。銀河帝国の支配者ゴルデンバウム王朝を打倒し、自ら戴冠してローエングラム王朝を樹てる。

ジークフリード・キルヒアイス

(Sieghard Kircheis)

ラインハルトの腹心であり親友。ルビーを溶かして染めたような赤毛と感しの良い青い目の長身の若者。戦場で決して逆上らない、智と勇を兼備した帝国軍屈指の驍将としてラインハルトを補佐し続ける。『神々の黄昏』の後、ラインハルトに先んじて帝都に戻り、ラインハルト戴冠の準備に奔走する。上級大将。後に元帥、帝国大公。

アンネローゼ・フォン・グリューネワルト

(Annerose Gräfin von Grönwald)

ラインハルトの姉。一五歳の時、時の皇帝フリードリヒ四世の後宮に納められ、グリューネワルト伯爵夫人となる。そのフリードリヒ四世の死後、ラインハルトたちの許へ戻るが、その後、わけあってフロイデンへと隠棲する。後、ラインハルトにより大公

妃の称号を贈られる。

ヒルデガルト・フォン・マリンドルフ

(Hildegard von Mariendorf/Fürstin Mariendorf)

マリンドルフ伯爵家の一人娘。伯爵令嬢マリンドルフ。通称ヒルダ。短くした、くすんだ金色の髪とブルー・グリーンの生き生きした瞳の、美貌の少年を思わせる女性。帝国軍幕僚総監代理に任じられ、中佐待遇でラインハルトの遠征に同行した。帝国宰相首席秘書官を兼務し、ラインハルトのよき補佐者となる。

オスカー・フォン・ロイエンタール

(Oskar von Reuenthal)

帝国軍上級大将。後元帥・統帥本部総長。青い左目、黒い右目の金銀妖瞳の美男子。ミッターマイヤーと並んで『帝国軍の双璧』と称される名將。智と勇のバランスにおいては、ラインハルト、ミッターマイヤー、ヤンを凌ぎ、キルヒアイスに比肩すると評される。漁色家。乱世の梟雄と評する声もある。

ヘルムート・レンネンカンフ

(Hermut Lennenkampf)

帝国軍上級大将。堂々たる口髭が不似合いな、貧相な中年男。ただ、アニメの画を見るとJ・スターリンを連想してしまう。バラートの和約後、高等弁務官として同盟首都に駐留する。ヤンにはイゼルローンとライガール、トリブラ宙域の戦いで連破される屈辱を味わった。別名、正義の人、レンネンカンフ大佐。

ヤン・ウェンリー

(Yang Weng-ri)

銀河英雄伝説の主人公の一人。同盟軍大将。イゼル

ローン要塞司令官・兼・駐留艦隊司令官。歴史を学ぶ目的で同盟軍士官学校に入り、そのまま意に反する形で軍人となる。「エル・ファシル」で多くの民間人を救い、若き英雄となる。バーミリオン会戦の後、退役してフレデリカと結婚する。

フレデリカ・グリーンヒル

(Frederica Greenhill)

同盟軍大尉。知性と美貌を兼ね備えた、ヤンの副官。バーミリオン会戦の後、退役してヤンと結婚し、F・G・ヤン夫人となる。

ユリアン・ミンツ

(Julian Mintz)

トラバース法でヤンの養子になった、亜麻色の髪の中々に端正な顔立ちの少年。ヤンの許で軍人を志し、フェザーン駐在武官を経て今は大尉。地球教徒の秘密を求めて地球へ向かうのは原作と同じ。今後、本誌の作者がユリアンのことを忘れないでいるかどうかは疑問あり。

ウランフ

(Uranfu)

同盟軍中将。原作に反して、帝国領進攻作戦時の惑星リューゲンでの戦いに生き残る。貴重な同盟軍の将帥。バーミリオン会戦で帝国軍ミュラー艦隊とキルヒアイス艦隊を迎え撃ち、ヤンに貴重な時間を稼がせた勇将。会戦を生き延びる。

アレクサンドル・ビュコック

(Alexander Burdock)

アムリッツア後、大将となり、同盟軍艦隊司令長官となる。同盟軍の宿将。原作黎明編ではもっと怖いオッサンかと思っていたが、その後、案外に話の分

かる老師という感じの人であることが分かった。パリートの和約後、退役。

ヨブ・トリューニョット

(Job Trüdnicht)

同盟最凶の政治家。原作通り、帝国に移り住む。

アドリアン・ルビンスキー

(Adrian Rubinsky)

フェザン自治領主。黒狐。今は身を隠している。いつまで隠れている気なのかは知らない。

ハイドリッヒ・ランゲ

(Heidrich Lange)

帝国内国安全保障局長。栄養の満ち足りた赤ん坊のような容貌に、唯一神へ語りかけるような荘重な重低音の声の所有者。

【本編オリジナルキャラクター紹介】

グレーチェン・ヘルクスハイム

(Gretchen Theresa Herxheim,

Margareta Therese von Herxheimer)

OVA『奪還者』に登場した、ヘルクスハイマー伯の娘で亡命者。亡命後、グレーチェン・ヘルクスハイムを名乗る。紫水晶の瞳と淡い金髪の、端正な顔立ちの女性で、本誌では大尉。パーミリオンの負債のため入院中。

ヴェンツェル・ハインリッヒ・フォン・ベンドリング

(Wenzel Heinrich von Bending)

同じくOVA『奪還者』で、最後にマルガレータを同盟へ亡命させる上での後見人として、彼女に同行した、伯爵家の三男坊。本誌では、中佐として帝国

高等弁務官への同盟軍側連絡士官を務めている。

シャルロッタ・ゼーダーシュトリーム

(Charlotte Söderström/Lotti Söder)

同盟軍士官学校でのグレーチェンの同期生。通称ロッティ・セーデル(Lotti Söder)。黒髪・黒瞳の眼鏡娘。グレーチェンよりも実年齢二歳年上。グレーチェンの親友。本誌では中尉、統合作戦本部付。

フランツペーター・ヨハネス・パウアーシュミット

(Franzpete Johannes Bauerschmitt)

帝国宰相府付き宿直医で、国立オーティン文理科大学医学部准教授。膠原病の専門研究者としての実績もあり、同時に臨床医としても優秀な経歴を持った若い医師。マリーンドルフ伯爵家の支援で、難病の研究に取り組んでいる。

コルネリア・ゲルトルデ・フォン・シュミットパウアー

(Cornelia Gertrude Vizegräfin von Schmittbauer)

シュミットパウアー子爵家の最後の当主。シュミットパウアー子爵夫人。通称ゲルタ。皇帝エルウィン・ヨーゼフ二世を誘拐し、二週間あまりも帝国軍の追求をかくぐつてのけた。ラインハルトが皇帝に対する処遇を改める旨を公表したことから、皇帝と共に戦没者記念墓地に現れ、夫と兄の墓所の前で事切れる。始祖がルドルフ一世から与えられた『帝室のために身を挺せよ』の言葉を最後まで実践した、シュミットパウアー一族の最後の一人。ヒルダの友人でもあった。白兵の名手でもあり、キルヒアイスとは二度、ラインハルト自身とも一度、直接に白兵戦を戦っている(以上、『木漏れ日と遠き日』迄)。

コティ

(Alban Cotti)

伍長。巡航艦『ハリスバーク』搭乗。グレーチェンとは共に帝国軍のフェザン侵攻への強行偵察を行った。

ヴィラルドゥアン

(Alphonse Villardouan)

同盟軍J二七駐留艦隊旗艦『ハリスバーク』の電子戦士官で中尉。艦隊の脱出行で、グレーチェンを補佐する。

狼犬

(Wolfskunt)

フェザンの酒場『ドラグーン』にいた情報屋の女性。艶やかな長い黒髪と、ほとんど白目の見えないほどに大きな黒瞳の持ち主。フェザンの高級住宅街に、彼女を『奥様』あるいは『お嬢さま』と呼ぶ老執事と暮らしている。

ミハエル・タウゼントシュタイン

(Michael Tausendstein)

帝国・ラストエンテ星系出身の大尉。キルヒアイスの副官。ある事件でウジを救け、友人となる。

ウルシュラ・ザーネヘルシュテラー

(Ursula Platzchen Salmeherseller)

キーキ職人の女性。ミハエルの恋人。愛称ウジ。キーキ職人の専門職人資格を持ち、今は帝都の有名なホテルで働いている。